

# メンフィス

熊崎 真司\*

## 1. 遺跡のエジプト学的特質

メンフィスは、カイロの南方約23kmに位置する遺跡で、ナイル川西岸の氾濫原中央に位置する10の遺丘からなっている (Fig.1)。メンフィスが位置するのは、ナイル川渓谷の中でも極めて狭窄な部分にあたり、その幅は7kmを大きく超えない。遺跡は、現在のアザゼーヤ村、エズベト・ガブリ村、ミート・ラヒーナ村、バドラシーン村、シンバーブ村に位置し、東西幅約1.5km、南北幅約4kmの規模を有している。ただし、現状、遺跡と認識されている範囲は、プトレマイオス朝時代に存在した都市規模の約10%にも満たないものと考え

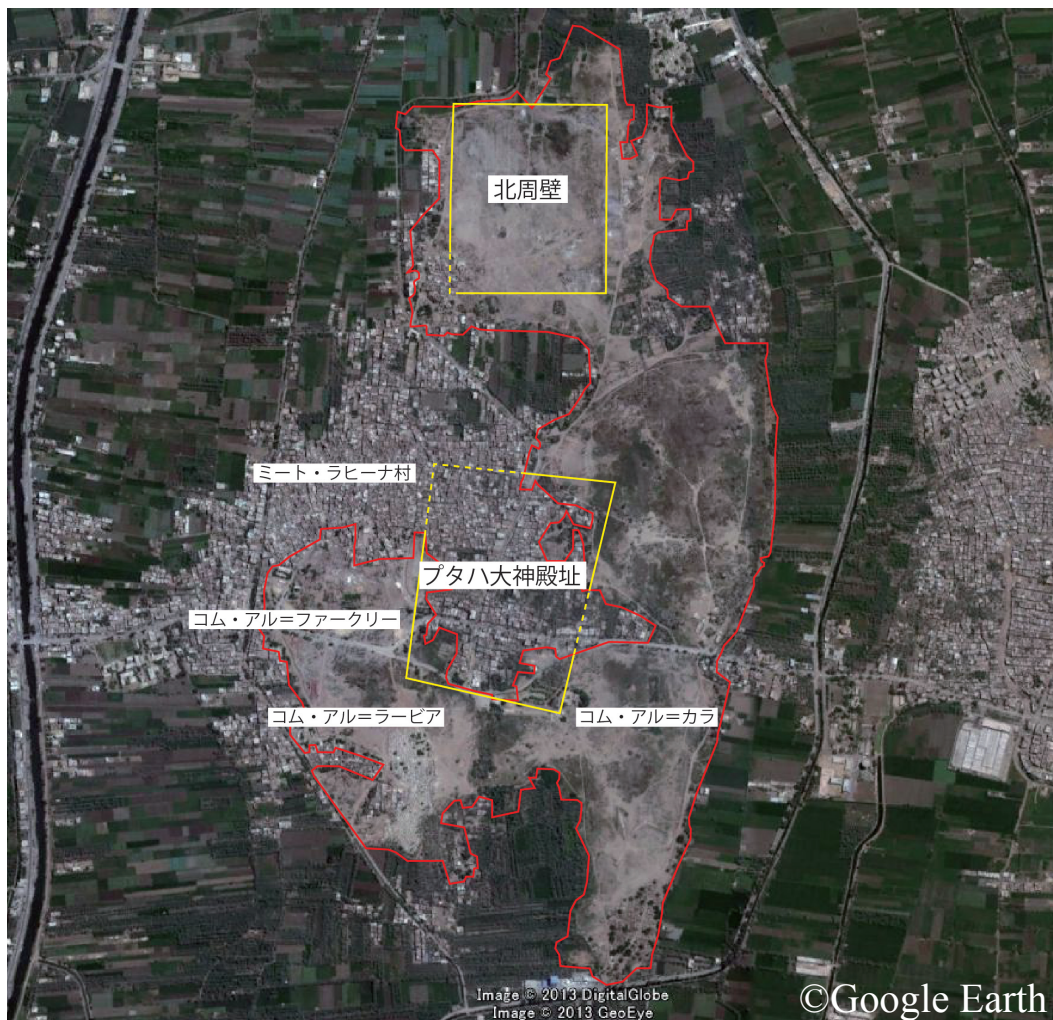


Fig.1 メンフィス周辺図 (写真は2012年9月のもの。橙色線は緩衝地帯を、黄色線は遺構周壁があった箇所を示す。)

\* 早稲田大学文学研究科考古学コース修士課程

られている。

現在、遺跡名称、及びかつてこの地に存在した都市の名称として使用されているメンフィスという呼称は、元を辿れば南サッカラにあるペピ1世のピラミッドの名前「メン・ネフェル (*Mn-nfr*: “確固とした美しい”の意)」に由来している。古王国時代第6王朝に造られたこのピラミッドの名前は、転じてペピ1世のピラミッド都市を指すものとなり、新王国時代第18王朝の頃にはこの地にあった首都の呼称としても用いられるようになった。「メンフィス」は、この「メン・ネフェル」をギリシア語で表現したものである。メンフィスの位置するこの土地は、デルタ地帯を支配しつつ、東西砂漠を經由した交易経路を確保する上での要衝として、上下エジプトの支配に欠くことのできないものであった。それゆえ、第1王朝に建設されて以降、ナイル川流路の移動によって、徐々にその位置を変化させながらも、メンフィスは王朝時代を通して、首都、あるいは、行政の中心地として繁栄したと考えられている。

メンフィスに関する記述は、ヘロドトス、ストラボン、ディオドロス・シクルスに代表される歴史家や旅行家の記録や16世紀の旅行記に散見されるが、廃墟と化したメンフィスが学術的な調査の対象となったのはナポレオンの遠征が行われて以降のことである。19世紀から各国調査隊による発掘調査が実施され<sup>1)</sup>、現在も英国のエジプト探査協会 (Egypt Exploration Society)、ロシア隊、ポルトガル隊による調査が進められている。現代居住域との重複関係から王朝時代の居住域を調査することが難しいエジプトにおいて、メンフィスは極めて重要な遺跡として認識されている。

以下では、これらの成果を踏まえつつ、時代ごとのメンフィスのあり方を概観してみたい。

### (1) 第1中間期以前

伝統的に、メンフィスは第1王朝の創始者とされる伝説の王メネスが建設した都市だとされている。D.G. ジェフリーズの研究では、建設当初の初期メンフィスは、現在のメンフィスよりも砂漠縁辺部に近い、アブ・シール村周辺に存在したと指摘されている (Jeffreys and Tavares 1994)。都市の位置は、ナイル川流路の移動によって、徐々に東進、現在の位置に至ったと考えられている。現在メンフィスで確認されている居住に関する最古の痕跡は、コム・アル＝ファークリー地区で発見された第1中間期の集落址と墓域である。メンフィスには未発掘地点が多いため、その全貌が明らかになっているとはいえないが、現状、これ以前の遺構は確認されていない。また、最も多くの調査が実施されてきたプタハ大神殿域周辺の遺構群は新王国時代以降のものであることが分かっているため、この現状を見た限り、ジェフリーズの指摘は高い信憑性を有するものと判断できる。

### (2) 中王国時代から末期王朝時代

プタハ神を主神に据えるメンフィスは、中王国時代以降も、宗教上の重要な中心地として機能した。ミート・ラヒーナ村に隣接するプタハ大神殿は、プタハ神を祀るメンフィス最大の神殿であったとされる。W.M.F. ピートリーによって行われた日乾煉瓦周壁の記録 (Petrie 1909a) を基に、神殿域の面積はおよそ 275,000m<sup>2</sup> であったと概算され、ルクソール東岸カルナクのアメン大神殿の最終的な規模に比肩するエジプト最大級の規模を持っていたことが分かっている。しかし、現代村落と近接しているために発掘調査の進行は困難であり、神殿域内西側の塔門とそこから通じる列柱室を除けば、内部の詳細な遺構配置がほとんど明らかになっていない。この列柱室と塔門は第19王朝のラメセス2世の建造によるものであるが、周壁の他箇所では、第12王朝のアメンエムハト3世のまぐさ石や第18王朝のアメンヘテプ3世の石材など、より古い時代の石材も発見されている。この他、塔門付近からは、ラメセス2世の巨像やスフィンクス、プタハ神をはじめとする神々の群像が

出土した。神殿域内の南西角付近には、アピス牛のミイラ製作施設があり、石灰岩や方解石で製作された解体用の寝台が発見されている。ここで製作されたアピス牛のミイラは、サッカラへと運ばれ、セラバウムに埋葬された。現存するのは末期王朝時代の所産であるが、下層には、より古い時代の施設も存在するものと考えられている (Jones 1990)。

プタハ大神殿域の周辺でも、複数の遺構の存在が明らかになっている。神殿域の南西角付近では、プタハ神とセクメト女神のものと考えられる小神殿址が、南側ではハトホル女神の小神殿址が発見された。ハトホル小神殿址では、現在も女神の顔を象った柱頭を確認することが可能である。さらに、神殿域の東側にあるコム・アル＝カラ地区では、プタハ神殿址とメルエンプタハ王の王宮址も発見された。プタハ大神殿域の北側からは、巨大な周壁が発見されており (北周壁)、周壁の中からは第26王朝の王アプリエスの王宮址が発見されている。王宮址から出土したレリーフ・ブロックからは、サイス朝における芸術復興を窺い知ることが出来る。

また、メンフィスにおける集落の発展を明らかにする上で重要なのは、コム・アル＝ラービア地区で発見された集落址の調査成果である。1980年代、英国エジプト探査協会によって重点的な発掘調査が行われ、出土した膨大な土器群の精査を通して、中王国時代から第3中間期にかけての集落の発展が明らかにされている (Jeffreys 1985; 2006; Aston and Jeffreys 2007)。

### (3) プトレマイオス朝以降

プトレマイオス朝時代初頭に至るまで、メンフィスは行政上の重要な中心地であり続けたが、アレクサンドリアの建設以降は、その重要性を大きく薄れさせた。その後、ローマ時代に至るまで都市としての利用は継続されたが、アラブの征服後、現在のカイロにアル＝フスタートが建設されたことで、メンフィスの都市機能は消滅していった。さらに、続いて建設されたアル＝カーヒラ (現在のカイロ) の発展が進んだことで、メンフィスは完全な廃墟と化し、16世紀に至るまで、特段注目されることもなかった。メンフィスの廃墟は、12世紀に至るまでその姿をとどめていたものの、採石活動や肥料としての日乾煉瓦採掘によって破壊された。今日におけるメンフィスの問題点は、こうした忘却と破壊の過程の上に存在しているといえる。

## 2. 遺跡の現状

遺跡が現代居住域と近接、あるいは重複して存在するメンフィスは、世界遺産「メンフィスとその墓地遺跡ーギザからダハシュールまでのピラミッド地帯」として登録された他の遺跡群とは少々異なる様相を呈している。以下では、(1) 衛星写真による概観、(2) 公開されている施設、(3) 公開されていない遺構・地区の3つの項目に分けて現状の説明を行う。

### (1) 衛星写真による概観

衛星写真を利用してメンフィスを概観すると、現代居住域がプタハ大神殿域内部にまで入り込んでいる様子を明瞭にみて取ることが出来る (Fig.1)。プタハ大神殿址は極めて大規模な遺構であるが、現在は神殿域の大部分が現代の居住域として利用されている。1978年にメンフィスが世界遺産「メンフィスとその墓地遺跡ーギザからダハシュールまでのピラミッド地帯」の一部として登録された時点で、既に遺跡内における居住域や農地の拡大はかなり深刻化していた。そのため、本来、遺産を保護するために設けられる緩衝地帯 (バッファゾーン) も、当初から既存の居住域や農地を避ける形で設定されている (Fig.2 左)。衛星写真を利用して居住



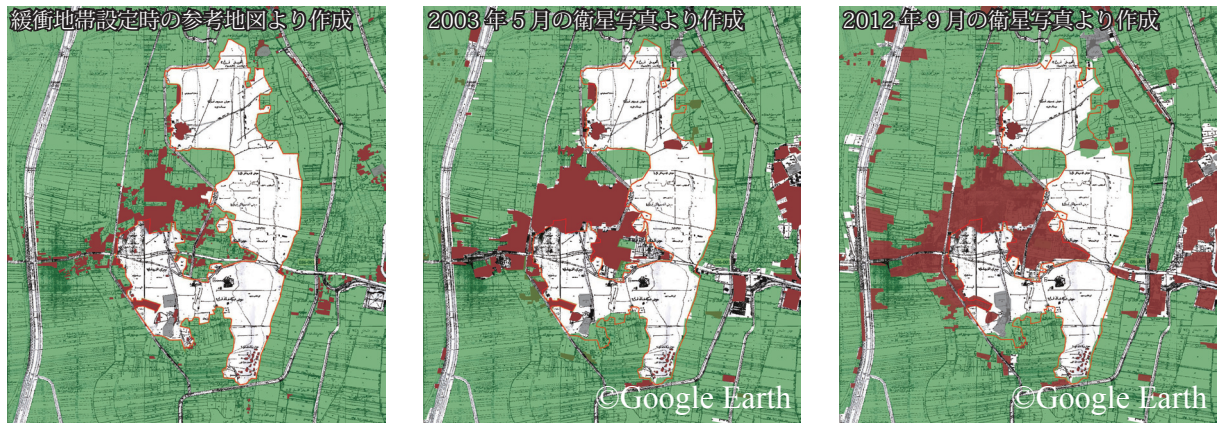


Fig.2 居住域、農地、墓地の広がり（緑色が農地、赤茶色が現代建造物、灰色が墓地である。）

域や農地、墓地の広がり（緑色が農地、赤茶色が現代建造物、灰色が墓地である。）の推移を確認してみると、市街地が大きく発展する一方で、緩衝地帯の内側における住居の増加はやや低調となっている（Fig.2）。しかし、その一方で、緩衝地帯の外側では、遺跡の存在する範囲であるにも関わらず、居住域が急速に拡大している。また、緩衝地帯内における、現代墓地の拡大も問題の1つとしてあげることが出来るだろう。

## (2) 公開されている施設

現在、観光客向けの整備が施されている施設は、プタハ大神殿域内南側の敷地を利用したメンフィス博物館に限られる（Fig.3）。ラムセス2世の巨像が屋内展示されている（Fig.4）他、屋外にはスフィンクス像（Fig.5）をはじめ、偽扉やステラ、像などが展示され、観光客の主要観光ルートの一つとなっている。敷地内には清掃が行き届いており、土産物の露店も整然と配置されている。しばしば遺跡の周辺では土産物屋が歩き回って品物を販売する光景が見られるが、メンフィス博物館敷地内においてはそういった光景が見受けられなかった。



Fig.3 メンフィス博物館の衛星画像

（黄色線は敷地範囲、赤色線は屋内展示、橙色線は野外展示、青色線は土産物屋の範囲を示している。）



Fig.4 ラメセス2世の巨像



Fig.5 スフィンクス像と傍らに立ち並ぶ露天

来館者の快適な観覧に配慮した措置だといえるだろう。

ただし、博物館としての評価を行った場合、いくつかの問題点も存在する。まず、展示物の多くが野外に露天展示されており (Fig.6)、一般的な博物館に見られるケース類はほとんど存在しない。偽扉やステラの一部には来館者が手を触れるのを防止するカバーが掛けられているが、これも展示物の温湿度等、保存状態の管理を意図したものではない。また、展示物の配置は、学術的な意味づけを伴って行ったものというよりは、美的感覚に任せたオブジェの配置に近い。展示物に関する説明書きが不十分であったり、欠如していたりといった点から考えても、学術的な展示方法がとられているとは言い難いのが現状である。



Fig.6 敷地南側の野外展示

### (3) 公開されていない遺構・地区

先述したように、現在のところ、メンフィス博物館を除くと、観光客への公開に向けた整備が進んでいる施設や遺構、地区は他に存在しない。また、遺構や地区を保護のための整備も十分に行われているとはいえ、メンフィスの遺構群は危機的な状況にあるといえる。例えば、過去に多くの発掘調査が実施されたプタハ大神殿域では、地下水の上昇によって深刻な被害が生じている。塔門と列柱室の周辺では、地表面がやや低くなった箇所に水たまりが生じている。湿度の高さのために、石材の表面には塩分の析出が進み、劣化が懸念される。さらに、過去の調査によって掘り下げられた地点では、付近の住民による廃棄物の投棄が行われ、現在でも、廃棄物の集積が確認できる (Figs.7-8)。こうした現状は、塔門や列柱室以外の遺構、地区においても確認できる。現在発掘が進められているコム・アル＝ファークリー地区にも、以前は廃棄物の集積が存在しており、2011年の調査開始時には重機による除去作業が必要であった (Fig.9)<sup>2)</sup>。現段階では、遺跡のこうした状況について特別な対策はとられておらず、調査の手が及ばない地区では、こうした問題が深刻化している<sup>3)</sup>。





Fig.7 プタハ神殿址西側東門付近



Fig.8 プタハ神殿址西側東門付近（寄り）



Fig.9 コム・アル＝ファークリー地区（2008年当時）

さらに、調査が行われなくなり、外部の人間の足が遠のいた地区には保安上の問題も存在する。多くの野犬が付近を徘徊している他、観光客等の外国人来訪者に対して近隣住民が抱く感情も良好であるとは限らない。遺構付近で住民から投石を受けたとの報告もある<sup>4)</sup>。以上のような理由から、メンフィス博物館以外の地区への立ち入りは推奨されていないのが現状である。

一方、現在進められているコム・アル＝ファークリー地区での発掘調査は注目すべきものであるといえる。この調査は、フィールド・スクールも兼ねており、実際の調査を通して、将来査察官になるエジ

プト人を主な対象とした技術伝達が図られている。このプログラム内では、調査手順や、測量用機材の扱い、調査後の整理作業に至るまで、専門的な指導が行われる<sup>4)</sup>。実際に発掘風景を視察した際には、ちょうど住居址とみられる箇所に関して調査が行われていたが、グリッドや層位に基づく精密な調査が進められている様子を確認することが出来た。調査に立ち会うことになる査察官が調査の指示を直接行うことはほとんどないものの、適正な調査の実施がなされているかの判断、及び調査経過の報告を行う上でも、遺跡に対する向き合い方を伝える上でも、このプログラムは重要な事業であるといえる。

### 3. 問題点のまとめ

王朝時代を通じて、行政上、宗教上の中心地として繁栄したメンフィスは、エジプト学において特に重要な遺跡として位置づけられる。しかしながら、メンフィスにおける遺跡管理は、その位置づけに即したものだとはいえないのが現状である。ここでは、先に述べた遺跡の現状を踏まえ、(1) 遺跡の保存、(2) 遺跡の活用という観点からメンフィスを取り巻く問題点を扱う。

### (1) 遺跡の保存

メンフィスにおける遺跡の保存、整備を進める上での問題点多くは、現代居住域との重複、あるいは、近接関係に由来している。例えば、世界遺産登録に伴ってメンフィスに設けられた緩衝地帯は、既存の農地や居住域を避ける形に設定されている。結果、緩衝地帯内に含まれなかった地区は、本来遺跡の一部でありながらも、事実上、保護の対象になり得ず、居住域や農地の無秩序な発達によって重大な危機に瀕することとなった。また、緩衝地帯周辺の過密化は、それ自体、近隣の深刻な土地不足に直結する。そのため、土地を求めた住民による墓地や農地の拡大が、緩衝地帯内の遺跡を脅かす二次的な脅威となっている。住民による廃棄物の投棄も、地下水の上昇に伴う塩害と並んで遺跡の劣化を招く要素であるといえるが、近年調査が行われていない地域では、外国の調査隊からの目も届かず、対処が十分に行われているとはいえない。

おそらく、農地や墓域の拡張を一時的に禁止し、廃棄物の一括撤去を行うのは不可能なことではない。しかし、これまでの経緯を見る限り、それらは、あくまで一時的な対処にしかなり得ないというのも事実である。問題を解決するためには、メンフィスの遺跡としての価値や世界遺産としての重要性に関して、近隣住民が理解を深める必要があるものの、現状ではそれも難しい。居住に関わる脅威から本来的な意味での遺跡保護を目指すのであれば、ルクソール東岸のスフィンクス参道や西岸のクルナ村で実施されたような住民の移動も視野に入れて対策を講じる必要があるのかもしれない。

### (2) 遺跡の活用

コム・アル＝ファークリー地区で行われるフィールド・スクールのような例を除けば、遺跡の活用という側面においても、メンフィスは大きな問題を抱えているといえる。現在、メンフィスでは、メンフィス博物館の他に公開されている施設や遺跡が存在しない。活用という視点から言えば、そうした現状も批判の対象となり得るが、ここでは、特にメンフィス博物館が果たすべき役割に関して問題にしておきたい。メンフィスにおいて遺跡の公開が行われていない以上、遺跡としてのメンフィスの特徴や重要性を発信する役割はメンフィス博物館に期待されることになる。しかしながら、メンフィス博物館では、多くの場合、展示物が出土位置や詳細に関する情報を欠いており、遺跡を理解する上で重要な資料だという意味付けを希薄にしている。換言すると、メンフィス博物館が採用しているのは、資料の見栄えを重視したオブジェ的な展示方法であり、学術的な目的での活用に即したものだとは言えないのが現状である。また、露天展示の多さからも分かるように、展示物の恒久的な活用を目指す、十分な保存管理が行われているとも言えない。敷地内の清掃や土産物販売の管理等、来館者が落ち着いて観覧出来るような配慮は行き届いているため、今後は遺跡内に立地するフィールド・ミュージアムとしての役割を重視していく必要があるものと考えられる。

#### 註

- 1) これまでに行われた調査とその成果に関しては以下を参照 (Anthes 1959; 1965; Aston and Jeffreys 2007; Giddy 1999; Jeffreys 1985; 2006; 2010; Jeffreys and Tavares 1994; Jones 1990; Kemp 1977; O'Connor 1993; Petrie 1909a; 1909b; Petrie et al 1910; Porter et al 2003; Thompson 1988)。
- 2) ブログを通して、調査の様子が紹介されている (<http://www.aeraweb.org/blog/>)。
- 3) プタハ大神殿の塔門付近を視察した隊員の報告による。
- 4) 巻末「メンフィス・ネクロポリスにおける遺跡環境の現状」に掲載したエリア⑧の衛星写真も参照のこと。
- 5) 詳細は以下を参照 (<http://www.aeraweb.org/field-school-program/>)。また、註2のURLも参照のこと。